

現代シンガポールのリベラル派ムスリムによる 言論活動・社会運動の意義と課題

法政大学大学院 市岡卓

1 目的

この報告の目的は、現代のシンガポールで厳格で非寛容的な復興主義的志向が拡大する中で、これに対抗するリベラル派のムスリムの言論活動・社会運動の意義と課題を明らかにすることである。彼らは、他の民族・宗教やムスリムの中の少数者との融和、ジェンダー平等の実現といったイシューに対し、意見発表、政策提言や交流プログラム等を通じ、現代の要請に適合したイスラームの柔軟な解釈・実践に取り組む。彼らの取組みの意義と課題を分析することは、世界的に少数者への非寛容が広まる現在において、宗教コミュニティ内部からの変革の可能性を探る上で有益と考えられる。

2 方法

そこで本研究では、リベラル派のムスリムたちのグループ“Reading Group”のウェブサイトおよび彼らが2018年に出版した書籍“Budi Kritik”が表明する見解について、ムスリム社会の人々や政治家の発言等の内容を参照しながら分析を行った。これを通じて、近年のシンガポールで他の宗教との交流・融和の問題等に関連し、ムスリムの厳格で非寛容的な宗教志向が論議になったイシューについて、論議の内容、論点等を整理した。また、“Reading Group”のムスリムたちによる政策研究や交流プログラムの成果と課題について、彼らへの聴き取りの結果も踏まえ、分析を行った。

3 結果

分析の結果、リベラル派のムスリムの活動は、ムスリム社会における言論空間の拡大に寄与するとともに、現代社会の要請に適合するイスラームの実践の方向性を提示し、多文化社会に生きるムスリムのあり方に関わる普遍的な問題提起を行っていることが判明した。しかし、彼らは、彼らと宗教志向が大きく異なる保守的なムスリムからは批判・攻撃され、そのために、異なる立場の意見が戦わされ、相互理解が深められ、新しい価値が創造される公共圏を創出するには至っていないことも明らかにできた。また、政府との関係については、他の民族・宗教との交流・融和などのイシューでは政府と認識を共有できるものの、ジェンダー平等の問題等については政府の政策変更に道筋をつけられていないことも明らかにできた。

4 結論

以上から、リベラル派ムスリムたちの取組みは、多文化社会に生きるムスリムが直面する課題について、シンガポール社会の枠にとどまらない普遍的な問題提起を行う点で、大きな意義を有するものと言える。一方で、彼らの取組みは、宗教志向によるムスリムの分断の中、彼らと意見を異にする人々との対話の不在、彼らの望む政策実現の困難さなどの課題にも直面する。リベラル派ムスリムの取組みは、多文化社会に生きるムスリムとしてのアイデンティティを再帰的に模索するものでもあるが、そのようなアイデンティティのあり方は、特にポスト9・11の文脈の下で他の民族・宗教との融和が強く求められるシンガポール社会に適應することにつながるが、ムスリム社会の中では必ずしも承認を得られない不安定なものでもある。

文献

Azhar Ibrahim (2014) Contemporary Islamic Discourse in the Malay-Indonesian World: Critical Perspectives, Petaling Jaya: Strategic Information and Research Development Centre.

Mohamed Imran Mohamed Taib and Nurul Fadiah Johari eds. (2018) Budi Kritik, Singapore: Literacy Centre and Reading Group. The Reading Group (<http://www.thereadinggroup.sg>)